

平成 27 年 9 月 11 日

博士論文審査報告書

デザイン研究科長 様

審査員主査 中原 宏



審査員副査 小西 敏正



審査員副査 細谷 多聞



審査員副査 羽深 久夫



学位申請者氏名	喜田 信代	学籍番号	1 2 6 5 0 0 2
申請学位 (専攻分野)	博士 (デザイン学)	専門分野	<input checked="" type="checkbox"/> 人間空間デザイン分野 <input type="checkbox"/> 人間情報デザイン分野
タイトル (サブタイトル)	明治期の九州地方における鉄川與助の教会建築工事の実施方式の特徴と 変遷		
審査日程	最終試験： 平成 27 年 8 月 5 日 公開発表会： 平成 27 年 8 月 17 日		
審査結果	<input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格		

※ 様式第 6 号「博士論文内容の要旨」を添付すること。

審査結果の要旨

本論文は、「明治期の九州地方における鉄川與助の教会建築工事の実施方式の特徴と変遷」と題し、明治期から九州地方を中心に教会建築家として活躍した「鉄川與助」による教会建築工事の特徴と変遷を、與助の直筆資料を中心に分析、検討して明らかにしたものである。

従来から鉄川與助についての研究はなされているものの、その建築工事、とくに明治期の工事請負、工事工程、工事費の受け払い等、建築施工の視点からは解明されていなかった。本研究では、鉄川與助の関わった教会及びその関連施設を対象として、與助の直筆資料に検討を加え、工事の内容と工事工程、請負契約関係書類と工事費の清算について具体的に明らかにするとともに、明治期の建築工事請負と比較検討することで、鉄川與助の建築工事請負の実態を明らかにした。明治期に建てられた全国の教会堂の3割が長崎にあり、その3割に鉄川與助が関わっていることを考え合わせると、本研究成果は極めて意義深い。

本研究の主な成果は以下のとおりである。

- 1) 明治期における教会建築と建築工事請負の実態について分析し、当時の工事請負方式や請負契約関係書類の整備状況を明らかにするとともに、鉄川與助の、他には類を見ない多数の教会および教会関係建築工事の実績を明らかにした。
- 2) 鉄川與助の建築工事の実績について、明治期・大正期・昭和期の時代区分毎に、教会・教会関係建築工事とその他の建築工事に分けて整理を行い、鉄川與助の建築請負業者としての基礎は、明治期の教会建築によって築かれたことを明らかにした。
- 3) 明治後期から大正初期において鉄川與助が関わった桐古天主堂改修工事、冷水天主堂新築工事、奈摩内天主堂新築工事、今村天主堂新築工事、旧長崎大司教館新築工事の建築工事請負契約関係史料の記載内容を分析・整理し、史料考証を行った。
- 4) 3) で史料考証を行った5件の教会ならびに教会関係建築工事の、建築工事着手前、建築工事中、工事竣工後の、工程管理と工事費清算方式について具体的に示した上で、建築工事請負の実態と変遷過程を明らかにした。
- 5) 1) で明らかにした明治期における建築工事請負の実態と、4) で明らかにした鉄川與助の建築工事請負の実態とを比較・検討し、鉄川與助の建築工事請負の特徴を明らかにした。

以上のように、本研究は明治期の九州地方で活躍した鉄川與助の教会建築の建築工事について分析し、今まで不明であった明治期の地方における民間建築工事の請負や工事費清算の実態を解明し、鉄川與助が中央と殆ど同時期に、中央と同等の近代的な建築工事請負方式を導入していたことを明らかにしたものである。

本論文は全体的に適切な方法で体系的に論理構成され、問題提起から結論まで整合性がある。また、デザイン学的な視点からは、外国人神父との密接な打ち合わせや鉄川與助の探究心によって、明治・大正期における西洋教会建築の平面的特徴、意匠等を工事に反映させて実現し、その成果として鉄川與助の教会建築の文化財的価値を生み出していることを解明した点が高く評価できる。さらに、学術的レベル、研究の独創性などにおいて優れていると判断でき、よって、博士論文（デザイン学）として充分価値あるものと認められる。

平成 27 年 8 月 5 日（水）、本学芸術の森キャンパス「大学院棟レクチャールーム」において審査員 4 名による「本審査会（最終試験）」を実施し、本審査会実施要領に基づき、本論文についての発表と口頭試問を行った。

多くの質疑に的確に回答できたことに加え、論文も予備審査での指摘事項を充分ふまえた適正な修正が行われていると判断した。なかでも、論文題目の末尾を修正したことにともない、論文題目が研究目的や成果と合致し、具体的で明確な内容を表出するものとなった。併せて、論文の構成も一部修正したことにより、論理構成がいつそう鮮明となった。

これらのことから、最終試験は「合格」と判定した。なお、軽微な指摘事項（字句の加筆修正等）が求められた。

また、平成 27 年 8 月 17 日（月）、本学芸術の森キャンパス「階段教室」において「公開発表会」を行った。多くの質疑に的確に回答できたと判断する。

平成 27 年 8 月 31 日（月）に提出された最終論文は、公開発表会での質疑や助言を充分にふまえるとともに、最終試験後の指摘事項については、すべてにわたり適正な修正が行われていると判断する。

以上のことから、博士論文審査は「合格」と判定する。